

# 風速60m、雨毎時360mm

## 圧力式も大型試験センターに新設備

一般財団法人建材試験センターの中央試験所(埼玉県草加市)では今春より、新しい構造試験棟と動風圧試験棟が稼働している。このうち動風圧試験棟には、屋根材や外壁材の防水性能などを確認する動風圧試験装置(圧力箱式漏水試験装置)と、最大60m/秒の脈動風を再現できる大型送風散水試験装置が導入

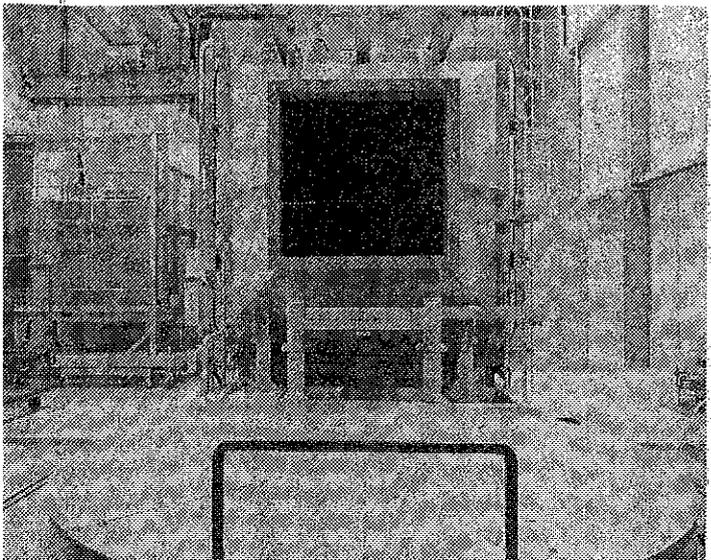
された。すでに屋根材の防水試験が実施されている。

同試験所には従来から、圧力箱式と送風散水式の試験装置があったが、新しい装置はいずれも大型化、高機能化された。屋根用の圧力箱式試験装置は、屋根面に最大1万500パスカルの正圧負圧をかけ、1分間に最大6ℓ/m<sup>2</sup>(時間雨量

360㎖相当)を散水する。勾配は水平から最大40度(約8寸5分)。試験体の大きさは約4m×3.5mと約2m×2m。屋根用のほか、直立タイプの試験装置も2つ導入された。

同試験所環境グループの松本知大統括リーダー代理によれば、圧力箱式は「風のエネルギーを圧力に置き換えて」試験する装置で、防水試験のほか耐風圧試験にも対応する。屋根面の上に箱をかぶせて圧力をかけるので、比較的気密性の高い屋根材の試験に適している。瓦など気密性の低い材料では下葺材を併用する。

大型送風散水試験装置は送風と散水を同時に行って、防水性能を確認する設備。「実際の自然環境に近い状態で、実物を使って試験するので、説得力が高い」試験方法だ。



送風散水試験機の送風口

10角と2・5m角の2種類で、前者の場合、風を絞ることで上限風速60m/秒を出す。後者は上限風速30m/秒で、風が当たる面が広いので取り合い部や複雑な構造など、大きな試験体に適している。

業界では緩急対応の瓦の開発も多く、また日本建築学会の建築工事標準仕様書(JASS12屋根工事)の改訂が進んでおり、同センターの新しい試験装置が活躍することも多くなりそうだ。